

若いトーマス・マン（十二）

—— 小説と小説家のあいだ ——

岡 光 一 浩

⑧ 短篇小説『トーニオ・クレীগー』（一九〇三年二月発表）

一 肯定・否定の評価の中で『トーニオ・クレীগー』をどう読むか。

短篇小説『トーニオ・クレীগー』（Tonio Kröger）は、雑誌『ノイエ・ドイチェ・ルントシャウ』（Neue Deutsche Rundschau）の一九〇三年二月号に発表され、さらにその年、ベルリンのS・フィッシャー出版社から短篇小説集『トリス・タン。六つの短篇小説』（Tristan. Sechs Novellen）収録の短篇小説として刊行された。この短篇小説は作品発表当初から、広範囲の大衆読者のみならず、当時の文学批評家や作家たちにも好意的に迎えられ、トーマス・マンの作品の中で最も多く読まれる作品となった。彼らはこの『トーニオ・クレীগー』を「見事な出来栄えの小さな傑作」と高く評価し、そこに若いマンの範例を見つけ、彼の文学のキーワードを探そうとした。国の内外を問わず、文学世界において『トーニオ・クレীগー』を一度ならず読むことは明らかに当時の一般的風潮であり、「トーマス・マンのこの初期の作品は一世代以上の文学世代を刻印し続けたと言っても過言ではない。」²⁾そう指摘したのは、現代ドイツきつての文学批評家として絶大な人気と信頼を得ているマルセル・ライヒ＝ラニツキ（Marcel Reich-Ranicki）である。こうした人気と高い評価の中にあつて、マン自らも、最初は自分でも自覚しなかつたような評価をこの短篇小説に下し、様々な自己解釈を加えた。こうして、彼自身がこの短篇小説の最大の賛美者になつていった。彼は『トーニオ・クレীগー』を「私の文学的寵児」³⁾、「私の書いた

ものの中では自分の心に一番近い作品である」と呼び、自分の作品において一大転換点をなす作品と見なした。確かに、こうした彼自身の発言を俟つまでもなく、『トーニオ・クレীগー』に若いマンの考え方や生き方が最も端的に現れていることに疑いを挟む者はいない。

しかし昨今、若いマンのこの代表作に対して、非難が浴びせかけられた。現代ドイツを代表する作家であり、カフカを中心とした論評で定評のあるマルティン・ヴァルザー (Martin Walser) は、『トーニオ・クレীগー』はドイツ語で書かれた今世紀最悪の小説だ⁵と毒ついた。彼がそのようにこの作品を痛烈に批判したのは一九七五年のあるテレビ討論でのことであったが、それが彼の真意であったことは、その数年後に著された彼の著書『自己意識とイロニー』(Selbstbewußtsein und Ironie)⁶によつてさらに明確となった。彼はここで、『トーニオ・クレীগー』が「中間的なもの、あれでもなければこれでもないと同時に、あれでもありこれでもある」という「両側に向けられた」イロニー的中間的存在である主人公の物語であり、また小説全体も「一見、異質な要素、つまり、憂愁と批判、誠実と懐疑、シュトルムとニーチェ、情緒と主知主義からなる混合物⁸」であると解釈され、イロニーを十分に駆使した小説であると強調されることに反論する。つまり、『トーニオ・クレীগー』にはイロニーが支配的であるというが、距離をもつイロニーは全く存在しない。確かにイロニカーは出てくるが、距離の欠如による内的独白ばかりで、結局は自己肯定のためのイロニーにすぎない。ただ中間がイロニーということでは、あまりに短絡的な結論でなんの解決にもなっていない。こうしたところに、ヴァルザーの痛烈な批判の根柢はあった⁹。

大衆読者や文学批評家、作家たちの人気と高い評価の中で発言されたヴァルザーのこの批判を私たちはどう考えるか。そして肯定と否定の評価の交錯する中で、私たちは『トーニオ・クレীগー』をどのように読むべきなのか。その読み方の姿勢を定めることが拙稿の最初の目標であるが、そのためにはまず、『トーニオ・クレীগー』の輝かしい人気と高い評価とはどのようなものだったのか、そしてそれが得られたのは何故なのか、が言及さなければならぬ。しかし、そのことの解

明にはまた、作品の輝かしい人気と高い評価を支える創作のための、大変な苦悩と時間が必要であったことを明らかにしておかねばならない。『トニーオ・クレীগー』の成立のために、マンは度重なる創作の苦悩と四年近くの歳月を要したが、そこにはこの作品が輝かしい人気と高い評価を得るに至った秘密が隠されている。

拙稿では、『トニーオ・クレীগー』の読み方を定めるために、作品成立の経緯を明らかにし、作品の輝かしい人気と高い評価の具体的受容に触れ、さらに、それが得られた理由について言及するという手続きを踏み、次いで、その定められた読み方によって、具体的に短編小説『トニーオ・クレীগー』の読みを行っていく。しかし、まずは、『トニーオ・クレীগー』の創作のための経緯について、作者マンに聞いてみることから始めよう。なぜなら、「これまで批評からまともな意見など聞いたこともない」と、自作の批評に抗議まで示し、「自分の作品のことなら自分が一番よく知っている」と豪語する「宣伝部長」(Werbechef)¹⁾の語に、最初に耳を傾けるのが筋であろうから。

- 1 Peter de Mendelssohn: Nachbemerkungen zu Thomas Mann 2, S.Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1982, S.35.
- 2 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, in: Thomas Mann und die Seinen, Deutsche Verlags-Anhalt, Stuttgart, 1987, S.101.なお、この論文には小崎順訳(『ノルデン』三十三、一九九六、一―十四頁)がある。
- 3 Thomas Mann Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1974, XIII.S.145. (On Myself) (以下、トーマス・マンの作品については、巻数、頁、作品名のみを記す。)
- 4 XI.S.115. (Lebensabrig)
- 5 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.93.

- 6 マルティン・ヴァルザー『自己意識とイロニー』（州崎恵三訳）、法政大学出版局、一九九七。
- 7 »etwas Mittleres, ein Weder-Noch und Sowohl-Als-auch«, XII.S.91. (Betrachtungen eines Unpolitischen)
- 8 *Ibid.*, S.92.
- 9 他にも、この小説を、精神の「生」に対する同一化という方向ではなく、むしろ逆の差異化を推し進めているかのようだとする別の評者の否定論もある。(三瓶憲彦『死の変奏 ヘルマン・ブロッホ／トーマス・マンのために』、松籟社、一九九七)
- 10 Thomas Mann: Briefe an Otto Grautoff 1894-1901 und Ida Boy-Ed 1903-1928, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1975, S.191. (1918.3.19)
- 11 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann »O sink hernieder, Nacht der Liebe«, in: Sieben Wegbereiter, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart München, 2002, S.77. なお、この本には部分訳書(マルセル・ライヒ＝ランニッキ『やはりを降らせ、愛の夜よ——二十世紀ドイツ文学七人のパイオニア』(丘沢静也訳)、岩波書店、二〇〇四年)がある。
- 二 『トニーオ・クレীগー』の成立の経緯
- 『トニーオ・クレীগー』は、度重なる困難を経て、長編小説『ブッデンブローク家の人々』よりも長い年月をかけて誕生した。この章では、その創作の舞台裏を覗いて、成立の経緯について明らかにする。自分の作品の成立の経緯について、マンはいつも、あの真意はこうなのですよ、あのときにはこんな事実があったのですよ、と様々なところで真相を明らかにしているが、彼のそうしたなんでも説明したがかり屋の性癖どおり、『トニーオ・クレীগー』についても様々なところで説明を加えている¹²。それらの中で、私たちがまず耳を傾けるべきは、次の二つの彼の発言だろう。「ミュンヘンのアルベルト・

ランゲン出版社の編集員であった時、私が休暇を過ごしたズント海峡に面したオールスゴーで、あの『トーニオ・クレীগー』は無意識のうちに構想されたのです。」「『トーニオ・クレীগー』の構想は、私がランゲン出版社で働いていた年の、『ブッデンブローク家の人々』を書いていた時期に遡ります。私はその頃、二週間の夏休みをもらって、あの短編小説で描かれているような、リユーベックを経由してデンマークへの旅をしました。そしてヘルシンゲールに近い、ズント海峡に面した小さな海浜保養地オールスゴーで得た私のいくつかの印象が体験の核となって、様々な関連をもつその小さな文学作品が結晶したのです。」「前者は、一九二六年のリユーベック七百年記念祭での講演『精神的な生活形式としてのリユーベック』の中の、そして後者は『トーニオ・クレীগー』の構想の時期からおよそ三十年後の『略伝』の中の発言である。この二つの発言には重複する面もあるが、私たちが注目したいのは、『トーニオ・クレীগー』が『ブッデンブローク家の人々』の執筆中に、デンマークのオールスゴー (Aalgaard) で無意識のうちに構想された、という点である。これらの点をまず具体的に考察し、その後、その他の経緯にも触れ、『トーニオ・クレীগー』の成立の経緯についての全体像を明らかにしていきたい。

一八九八年四月末、マンはイタリヤからほぼ一年半ぶりにミュンヘンに帰ってきた。二十二歳になっていた彼は、本屋の店頭でも、少し前に出版されていた自分の最初の短編小説集『小男フリーデマン氏』を目にすることができたが、前年秋に書き始めた長編小説『ブッデンブローク家の人々』の続きを、このミュンヘンでも書き進めねばならないという宿題を抱えていた。しかし、筆はなかなか進まなかった。そのうえ経済的な理由のために、十一月からこの地にあるアルベルト・ランゲン出版社で雑誌『ジンプリチシムス』の編集や校正の仕事に携わらねばならなかった。この出版社勤めは、長編小説を書き終える少し前の一年間余りで、出版者側の解雇で中止となるが、その間に彼は、この長編小説からの「一休み」と称して翌年六月には短編小説『衣装戸棚』を、そして八月には『ジンプリチシムス』の仕事に関わった縁で短編小説『しつぺ返し』を発表する。これらの短編小説の発表も、出版社勤めと同様、また確固とした経済的基盤のなかった彼に収入の面で潤いを与えることになったが、それに反し、肝心の『ブッデンブローク家の人々』の執筆は一向に前に進まなかった。それは、彼

が「楽しい気晴らしを断念しても、この小説を書き進めるために一日二時間を当てるのがやっとです¹⁵」と言うほどに、雑誌の仕事が忙しかったことにもよるが、実際には、ただ単に時間がないせいだけでもなかった。一族の解体・没落の物語をどのように終わらせるべきか、彼には分からなかったのである。トーマス・ブッデンブロークの死を描き、さらに息子ハンノーの青春と死を描くことによって、この長編小説の結末をどのようにしたらよいか、彼は途方に暮れ、疲れ、悩み苦しんでいた。物語の終わりは、一向に見えそうもなく、時間ばかりが経過していた。八月四日付けの二つの手紙には、彼の困惑の様子が見て取れる。ランゲン出版社の社主でユーベック時代の友人コルフイッツ・ホルム (Kortiz Holm) に宛て、マシは休暇の申し込みをする。「君がこちらに来るのなら、少しばかり休暇を取ることとはできないだろうか。数週間でも海そばで過ごすことが僕には必要なだよ。寝かせている本の原稿を、できれば今、片づきたいのだ。編集の仕事は少し滞るだろうがね¹⁶」また、クルト・マルテンス (Kurt Martens) 宛の手紙では旅の具体的な予定を語っている。「グムントへ私を招待したいというあなたのお申し出を非常に喜んでおりますが、残念ながら、あなたをそこに訪ねることはおそらくできないでしょう。私は今、できるだけ多く、出版社の仕事を片づけて、秋には少しばかり休暇を取りたいのです。山はとりわけ好きというわけではありませんが、海は私の気分にとても合う気がします。九月にスカンジナビアのどこかの海辺で過ごす計画を持っているのです¹⁷」すでに『ブッデンブローク家の人々』の執筆を開始してから二年が過ぎようとしていたその九月、予定通り彼は、「楽しい気晴らし」のためと称して、出版社から二週間の夏休みをもらって北への短い旅行を試みる。故郷リュウベックを訪ね、その後デンマークへ足を伸ばす旅であった。デンマークを旅の行き先としたこと、そこには、後述するように、ハムレットが意識されていた。この旅は決して「楽しい気晴らし」のための休暇旅行などではなく、『ブッデブローク家の人々』の結末に決着をつけたいという、マンの確かな目的を含んでいた。

十八歳で学業を投げ出し、逃げるように故郷を去ってから、五年半ぶりのリュウベック帰郷であった。しかも今回の帰郷は、「お忍び¹⁸」であった。まだ故郷には友人もあり親戚もあったが、彼は誰にも会おうとしなかった、いや、誰にも会いた

くなかった。誰の家にも宿泊せずに、かつての学友の父親が支配人をしていただけのもの、子供時代からよく知っていたホテル「ハンブルク市」(Stadt Hamburg)に宿泊する¹⁹。幸い、ホテルの告知票に姓名や身分や生まれを書いて、誰も彼に気付く者はなかった。彼は、町の中を、人に会うのを恐れ、かつ避けるようにこっそりと歩いた。知っている人に会うことはなかったが、運悪く、次の目的地のデンマークへ行く船着き場に向かうためにホテルを出ようとしたり矢先に、ミュンヘン警察の手配中の、デンマークへ高飛びしようとしている詐欺師に間違えられる事件に遭遇する。そんな苦々しい出来事もあったが、マンにとって今回の「お忍び」の故郷滞在の目的は、今は他人の手に渡っていたあの祖父母の家メング通り四番地の「ブッデンブローク・ハウス」を訪れ、『ブッデンブローク家の人々』の執筆で壁に当たっていたある場面を書き進めるための手掛かりを得ることだった。頓挫していた長編小説は、ちょうど市参事会員トーマス・ブッデンブロークの母の死と、それに続くブッデンブローク・ハウスの売却のところまで進んでいたのである。彼には、故郷の町を訪れてブッデンブローク・ハウスを目の当たりにし、現実を起こった祖父母の家の売却の話を回想の中に蘇らせ、長編小説の中のこの場面に臨場感を与え、さらには一家における屋台骨としてのトーマスの立場を確固としたものにしたという思いがあった。実際、出来上がっていた作品は、その思い通りに、家の売却に対する姉トニーの茫然自失とした激しい悲しみを描き、さらにはそのことによって、トーマスのそれに対する苦しみと嘆きを押さえた冷静な調子で描くことに成功している。

故郷リユーベックで二日間滞在後、マンは、船で渡ったコペンハーゲンで三日間観光などをして過ごし、その後さらに北上して、デンマークのズント海峡に面した小さな海浜保養地オールスゴーを訪れる。先にも指摘したが、ハムレットと関わりのあるヘルシングェルに近いこのオールスゴーが旅の目的地となったことには、「認識の嘔吐」に悩む男から、『ブッデンブローク家の人々』の結末のための暗示を得たいというマン自身の思いがあった。ハンス・ルードルフ・ヴァジエ (Hans Rudolf Vaget) は次のように言う。「マンは、ハンノー・ブッデンブロークの青春を造型するという問題に直面していた。

恐らく彼は、自分の回想を蘇らせ、再度、自分の「出発点」に関わりたいたいという欲求を感じていたと思われる²⁰。」しかし後

に、彼自身、この地で『トーニオ・クレীগー』が構想されたと述べていることや、この地での現実を模写しているようなこの小説の主人公の行動から考えると、後述するように、ここでは『ブッデンブローク家の人々』よりも、さらに強く『トーニオ・クレীগー』に関わるなんらかの意図が生まれたのである。マンは、この地で「オールスゴー海浜ホテル」に宿泊するが、そこでの滞在は、残っている彼の宿泊勘定書によれば、九月十一日から十六日までであった。一週間足らずのホテル逗留であったが、ここで彼は、ホテルでの舞踏会に参加するなどして「楽しい気晴らし」に努めた。しかし、ホテル逗留中の最も特筆すべきことは、ヘルマン・ヴィークマン (Hermann Wiegmann) も指摘しているように、旅行中に読む本として持参していたイワン・A・ゴンチャロフ (Iwan A. Gonscharow) の小説『オブローモフ』(Obolnow, 一八五七年)の読書に耽ったことである²⁰。先の『精神的生活形式としてのリュベック』には、「ゴンチャロフを私はズント海峡に面したオールスゴーで読んだ²¹」とある。人間社会に与すことができず内的な孤独の中に沈んで、社会的人間としては「無為な」生活を送った主人公オブローモフが子供時代や青春を振り返る「オブローモフの夢」の章を読んで、マンはその素晴らしさによく感銘を受けた。ペーター・ドゥ・メンデルスゾーン (Peter de Mendelssohn) のマン伝記によれば、彼は、この「オブローモフの夢」の章を「ロシア文学の最も美しい夢のシーン」と見なしたという²²。

故郷リュベック訪問、北国デンマークへの旅、そして『オブローモフ』の読書——この三つは、マンが「あの『トーニオ・クレীগー』は無意識のうちに構想されたのです」と語っているその「無意識」を作り上げ、その「無意識」から『トーニオ・クレীগー』の構想を生み出す大きなきっかけであった。では、それは、どんな構想だったか。この短編小説の第一章や第二章のシュトルム風の回想場面、そして第六章以降の「北への旅」——それらについての最初の構想であった。マンが「オールスゴーで得た私のいくつかの印象が体験の核となつて、様々な関連をもつその小さな文学作品が結晶したのです」と書いていることを、私たちはこの作品の中で明確に確認できる。この作品の中に、実際に体験した出来事がしばしば登場していることを、彼自身も次のように認めている。「『トーニオ・クレীগー』を書いた時の経験を思い起こさせたものは現

実によって与えられた、見かけは詰まらないように見える個々の事柄でさえも、生得の象徴的な意義をもっていて、構成に適合するものだとしたことであつた。あの青年期の短編小説の中の大衆図書館内の場面とか、警察が出てくる場面とかいうような場面は目的をもつて、イデーのため、機知のために考察したものだと思われるかもしれないが、そうではなくて、現実から取り出したものにすぎない²⁵。」彼は旅行後ほぼ一年して友人オト・グラウトフ (Otto Grantoff)²⁶宛てに、「オールスゴーから出したあの手紙をなくさないでほしい。それは、後にまた私にとつて必要になるはずですよ²⁷」という文面の手紙を出しているが、これなど現実の体験を作品の中に生かすマンの作品創作の秘密をよく示している。この文面は、マンがオールスゴーのホテルから旅行中の様々な体験を詳細にグラウトフに宛てて報告していたことを裏付けるとともに、その描写が、旅の体験を小説の中に生かせるほどに詳細であつたことを窺わせる。その手紙は現存しないというが、それはおそらく、要請に応じてマンに返されたのであろう。そうでなければ、『ト・ニオ・クレীগー』はあのように旅の体験を具体的に生々しく描写できなかつたはずである。グラウトフとの書簡集の中にその手紙が現存しないのは、おそらく、マン自身がなくしたためと思われる。

しかし、『ト・ニオ・クレীগー』の構想の大きなきつかけの中でその最たるものは、おそらく『オブローモフ』の読書であつたろう。主人公ト・ニオのあの二人の友人への感情は、オブローモフの子供時代や青春から影響を受けたものである。この旅における最も重要な出来事として、ヴィークマンは、『オブローモフ』の『ト・ニオ・クレীগー』に与えた文学的影響の大きさを挙げている²⁸。また、メンデルスゾーンが、『ト・ニオ・クレীগー』は、『オブローモフの夢』と同様、子供時代や青春への「帰郷の旅」の夢のような体験から生まれ、すでにこのオールスゴーでその輪郭以上のものを生み出したと述べているのも²⁹、マンの『オブローモフ』の読書を意識した指摘であろう。すなわち、オールスゴーで『ト・ニオ・クレীগー』が構想されたきつかけの第一は、この地で彼がゴンチャロフの『オブローモフ』を読み込んだという点にあつたと言わざるを得ない。このデンマークへの旅は、マンにとつて、確かに出発時には、『ブッデンブローク家の人々』から

の「一休み」であるとともに、『ブッデンブローク家の人々』の終わり方を模索したいという思いのあった旅であつたらう。しかし少なくとも旅の途次では、オールスゴーで『オブローモフ』の読書によって、旅の目的は大きく『トーニオ・クレীগー』の創作の方向に大きく傾いていった。マンの心の中では、オールスゴーにおいて、この旅は『ブッデンブローク家の人々』を越えて、その先を見つめる旅に変わっていったのである。

このように、『トーニオ・クレীগー』の構想の大きなきっかけは『ブッデンブローク家の人々』の執筆中の一八九九年に行われた、故郷リュベックを経てのデンマークへの旅において生まれた。しかし、その最初の漠然とした暗示というところであれば、それ以前にすでに存在していた。マンがデンマーク旅行への出発時に鞆の中に『オブローモフ』を詰め込み、旅の目的地をハムレットに関わるヘルシンゲールの近くとしたことからすれば、『トーニオ・クレীগー』の構想の準備はすでに、この旅行以前にあつたと言えるかもしれない。そのことを裏付ける別の例として、一八九八年十二月二十二日にリュベック時代からの友人グラオトフに宛てたマンの手紙の中にある『ただひとつ』(The One)とある詩を挙げることもできよう。この詩には、「認識は世界の最も深い苦悩である」という言葉もあるように、デンマーク旅行以前のマンがすでに、『トーニオ・クレীগー』のテーマである「認識」の問題にとらわれていたことを知ることができる。ヴァジェが指摘するように³¹、またそこにはすでに『トーニオ・クレীগー』のテーマの本質的な輪郭も認めることができよう。このようなことから、少なくとも『トーニオ・クレীগー』は、マンの言うように、単に「無意識のうちに」、思いがけなく生まれたのではなく、「無意識」にそれを生み出すその裏にはデンマークへの旅の体験があつたし、或いはまた、その旅行前には新しい小説のための構想が芽を吹き出しつつあつた。勿論それは、『ブッデンブローク家の人々』のハンノーの担う問題としてであつたが。

確かにマンの発言どおり、『トーニオ・クレীগー』が構想されたのは、長編小説『ブッデンブローク家の人々』の執筆中のデンマークへの旅においてであつた。しかし、その創作の思いは、旅から帰ってもマンの心の中から消えることはなかつ

た。それは、相変わらず彼を捉え続け、さらに強いものとなっていった。しかし、ミュンヘン帰郷後の彼は、しばらく集中して『ブッデンブローク家の人々』の執筆に携わるようになる。帰郷後すぐに遭遇した強烈なショーペンハウアー体験がきっかけとなって、彼は念願の、トーマスの死を描くことができ、さらにはその息子ハンノーの青春と死の物語を描き足し、翌一九〇〇年早々にはその長編小説の完結の見通しを得ることができた。しかし、帰郷後しばらくしてのクリスマス以前——しかも『ブッデンブローク家の人々』の執筆中——のものと思われる³²、次のような短いメモが残っている³³。

『トニーオ・クレীগー』

かなり多くの人が迷路に入り込んでしまうのには意識的な必然性がある。それは彼らにとって、
そもそも正道というものが無いからである。

温和で好意的な性格のゴッテ——心理的な認識のために精根をすり減らされる。

「おや、どうなさいましたの、バトウシユカ……」（小父さま）³⁴。

チューリヒ大学付属のトーマス・マン文庫 (Thomas Mann Archiv) 所蔵の覚え書き帳にあるこの三つの覚え書きのどれもがわずかの変更を加えられ、『トニーオ・クレীগー』の中に取り入れられている³⁵。この事實は、構想の早い時点からすでに、『トニーオ・クレীগー』の中心テーマが文学に関わる問題であったことを窺わせる。しかし、この覚え書きの中でのよりも特筆すべきは、当時すでに主人公の名前がトニーオ・クレীগーと決まっていた、その名前が作品の表題としても考えられていたことである。名のトニーオは、南国の生まれの母に因んでいるが、クレীগーという姓は当時執筆中の『ブッデンブローク家の人々』に登場するレープレヒト・クレীগー領事から借用されたと思われる。また、同じ覚え書き帳の数頁後には、小説の中でハンス・ハンゼンという名前が登場する、主人公トニーオの対照的な人物が、すでにこの時期、スカンジナビア語の「ターゲ」(Tage) という名前をもっている³⁶。このような事実から、『トニーオ・クレীগー』の中心テーマを「文学」とするおおまかな構想は、少なくとも、マンのデンマークから帰郷後の一八九九年末には出来上がっていたと

思われる。すでに述べたように、デンマークへの休暇旅行は『ブッデンブローク家の人々』からの「一休み」という意味合いもあつたが、マンにとつては、ハンノーの死を長編小説の結末に置くことは決まっていたものの、それをどのように描いてこの長編小説を終わらせるべきかという、骨の折れる結末を模索しての旅でもあつた。しかし、この旅は新しい小説の構想を確固としたものに昇華させる旅となつた。

次第に構想の膨らんでいく『トーニオ・クレীগー』に対し、マン自身、手紙の中で再三報告しているように、『ブッデンブローク家の人々』の結末が十分に納得のいくものになるまでにはまだかなりの時間がかかつた。『ブッデンブローク家の人々』を書き進めていけば、それだけ『トーニオ・クレীগー』に対する思いが膨らんでくる。音楽とチフスで死んでいったハンノー、彼を死なせたままでいいのか、という思いであつた。なによりもハンノーの死は、マンにとつて、自分の身代わりとしての死であり、彼には、ハンノーのあまりにも早い死で事をすべて終わらせるわけにはいかなかった。ハンノーの新しい再生の道を描こうという思いがマンの意識に上つたとしても不思議ではなかつた。相変わらず結末が決まらない『ブッデンブローク家の人々』に苦悩しながらも、マンの関心は、ハンノーの新たな生き返りの道を模索する方向により強く向かつていった。しかし、ハンノーの生き返りとして構想されたトーニオの物語を描くためには、マンにとつて、まずハンノーを、トーニオにうまく引き継がれるように死に至らしめる必要があつた。トーニオを「再び生の中に呼び戻されたハンノー・ブッデンブローク」にするためにも、『トーニオ・クレীগー』の執筆はしばらく脇に追いやられる。

一九〇〇年七月十八日、マンはグラオトフ宛の手紙で、「今日、私は長編小説の最後の行を書き終えました[※]」と書いている。当初、イタリアで比較的短いものとして書き始められたこの小説は、今や約三年を費やして分厚い長編小説『ブッデンブローク家の人々』として完結したのである。しかしそれは、全体を見渡して必ずしも彼の氣に入るものではなかつた。そこでさらにひと夏をかけて手が加えられ、この長編小説は漸く八月十三日に脱稿される。しかし、その後すぐに、『トーニオ・クレীগー』ではなくて、今度は、別の短編小説が構想され、それが一気に書き上げられる。この短編小説は『墓地へ

の道』という表題で、『ブッデンブローク家の人々』の四代に渡って描かれた、生きること悩むアウトサイダーと勝利に満ちた市民との敵対関係が「明快に」描かれた、その長編小説の「後奏曲」というべき作品であった。「長編小説の完成の喜びをすぐにももう一度味わうために」³⁹も、彼にはそれを書き上げることがどうしても必要であった。その後漸くにして秋には、すでに指摘した九月九日付けのグラオトフに宛てた手紙が示すように、『トニーオ・クレীগー』の執筆のための素材集めが開始される⁴⁰。しかし十月一日から彼は、一年志願兵としてバイエルン近衛歩兵連隊に入隊し、医学上の理由で延期されていた兵役義務を遂行する。またもや、『トニーオ・クレীগー』の本格的な執筆とはならない。兵舎や衛戍病院での彼のつらい精神的・肉体的労苦についてはすでに述べたが⁴¹、その軍隊生活も、幸いというか、足関節の病気のために十二月半ばには中止される。そしてやつと彼は、『トニーオ・クレীগー』の本格的な執筆に取り掛かることができる。十二月十七日付けの兄ハインリヒに宛てた手紙では、「今、短編小説の素材をかき集めています。待望の劇作品の前にもう一卷短編小説集が生まれる可能性は大です」⁴²とある。また兄に宛てた二十九日付の手紙では、もつとはつきりと「苦渋と憂愁を帯びた性格の新しい短編小説に取り掛かっています」⁴³と伝えている。この二つの手紙の言う短編小説とは『トニーオ・クレীগー』であろう。この時期に二つ目の短編小説集に入れるために書かれ、「苦渋と憂愁を帯び」ていたのは『トニーオ・クレীগー』しかない。また、「苦渋と憂愁」というシュトルムを思い起こさせる表現から、おそらくマンはこの時、リユーベックを経てのデンマークへの旅の際の様々な体験を踏まえながら、少年時代のアルミーン・マルテンス (Amin Martens) との友情や、恋愛抒情詩『ダンスのパートナー』に寄せる詩編』を捧げたことのあるダンス講習会での「栗毛の髪を束ねた踊り相手の少女」のことを回想し⁴⁴、トニーオのターゲ (後のハンス・ハンゼン) やインゲに対する感情を描く最初の二つの章に具体的に関わっていたと思われる。後にマン自身、この踊り相手の少女についてはその後どうなったか分からないと言っているが、このマルテンスについては、「ハンス・ハンゼンという名で『トニーオ・クレীগー』の中に出てきて一種の象徴的な生命を得た」と『トニーオ・クレীগー』との関わりを明言している⁴⁵。「後には飲酒に耽り、アフリカ

で悲惨な最期を遂げた」カタリーネウム実科学校時代のこの学友に対するマンの友情は、最初の文学的習作である『私の好きなある友人に寄せた詩』に表されているというが、それは、むしろ愛に近く、非常に苦悩に満ちたもので、トーニオのハンス・ハンゼンに対するそれと似ていた⁴⁶。晩年、かつてを回想して、マンは、マルテンスとの関わりを次のように述懐している。「私はあいつが好きだった。事実、あれは私の初恋だった。そして私は、あれ以上初々しい、あれ以上に幸福で苦しい恋は、その後ついで経験しなかった。……しかし私は、『トーニオ・クレীগー』の中で彼のために記念碑を建てたのです⁴⁷。」こうした経緯が示すように、『トーニオ・クレীগー』は、一九〇〇年八月に『ブッデンブローク家の人々』が完結した後、『墓地への道』の発表や三ヶ月半の軍隊生活を経て、十二月も押し迫った頃、「苦渋と憂愁を帯びた」シュトルム風の「情緒小説⁴⁸」として再度書き始められた。

しかし「苦渋と憂愁を帯びた」第一章と第二章を書き始めたマンに、年が明けると、厳しい現実が待ち受ける。彼は、「内面的」にかつてないほど激しく動揺した冬⁴⁹を体験することになる。一九〇一年二月十三日付けの兄宛の手紙は次のように言う。「ご機嫌いかがですか。僕の方はともいろんなことがありました。でも春になれば、僕も内面的にかつてないほど激しく動揺した冬を乗り越えているでしょう。全く真剣に自分を抹消しようと計画するほどの本当に悪質な意気消沈が、思いがけず、筆舌に尽くしがたい純粹な心の幸福に変わってきたのです⁴⁹。」そして後述するように、さらに続く——この二月十三日付けの手紙は『トーニオ・クレীগー』の執筆の大きな転換点であろう——ここに書かれた、自分の考えを捨て去ろうとするほどの意気消沈に陥った「内面的」にかつてないほど⁵⁰の激しい動揺とはなにか。それはおそらく、軍務体験による神経的疲労と、作家として生きていくうえでの不安であろう。そこには、『トーニオ・クレীগー』に激しく難渋しているマンの姿が浮かんでくる。それはまた、「一言で言えば、あなたはもてはやされているのに、私は目下、精神的にひどく敗北に陥っています⁵⁰」という、当時の兄に宛てた一九〇七年二月二十八日付の手紙に代表されるように、兄の長編小説『夢幻境にて』の成功に対するねたみを増加させたであろう⁵¹。では、そうした激しく動揺した冬を乗り越え、春には「筆舌

に尽くしがたい純粹な心の幸福」が訪れているだろうと推測するその「心の幸福」とはなにか。マンにどんな幸福が訪れているというのだろうか。それは、端的に言えば、難渋していた『トーニオ・クレーガー』の執筆の道が開かれるという予測であろう。どんな道か。「苦渋と憂愁を帯びた」シュトルム風の第一章と第二章の描き方に、そして、デンマークへの旅以前から存在し、その旅の中で膨らみ、その後も小説の中心テーマとなった文学という問題を、生き返らせたハンノーにいかにか担わせるかに、うまく道が開けようだという思いであろう。では、それを可能にしたのはなんだったのか。——マンの「憂鬱性や内気や神経質⁵²」の克服を助け、彼に「筆舌に尽くしがたい純粹な心の幸福」を与えたのは、画家で美術学校教授を父に持つエーレンベルク兄弟との親交であり、とりわけ弟パウルクとの深い友情であつた。パウルク・エーレンベルク (Paul Ehrenberg) との友情は、難渋していた『トーニオ・クレーガー』に好転の大きな風穴を開け、マンにこの短編小説をどのように描くのかのひとつのはっきりとした道を示したのだつた。マンがエーレンベルク兄弟と知り合つたのは、母を早く亡くした二人の兄弟が、マン家と遠縁関係に当たつたヒルデとリリのディステル姉妹 (Hilde/Lilli Distel) と異母兄弟姉妹として育つたこと、そして後に歌手として活躍した姉のヒルデと、マンの妹ユーリアとが親しかつたことに拠る。一八九九年の終わり頃、マンは彼らと音楽を絆として親交を結んだ。とりわけマンが深い親交を結んだ弟のパウルクは当時、画家でミュンヘン芸術学校の学生だつたが、ヴァイオリンが上手く、彼の影響でマンは再び、ヴァイオリンの練習に精を出すようになった⁵³。——この友情は後に『ファウストゥス博士』の中で、アードリアーン・レーヴァーキューンとヴァイオリン奏者ルーディ・シェヴェールトフェーガーとの関係として文学的に形象化される——。とりわけ二人が最も親密になつた一九〇一年から翌年にかけての友情⁵⁴は、『トーニオ・クレーガー』の完成に大きな役割を果たすことになる。

二月十三日付けの兄への手紙は、先ほどの文章から次のように続く。「しかし、これらの極めて非文学的で、極めて素朴で生々しい体験は僕に、あるひとつのことを分かせてくれたのです。」すなわち、パウルクとの友情の体験によつてマンが自分について理解したひとつのことは、「僕の中にもまだ、〈ハイロニー〉 (Ironie) ばかりでなく、なにか誠実で温かく善良な

ものが存在していること、すべてが呪うべき文学によって荒廃させられたり、いじくりまわされたり、食い荒らされたりしているわけではないということ」だった。さらに続いて、マンの文学についての考え方や、文学に対する自分の姿勢が次のように表明される。「ああ、文学は死です！僕には、文学のとりこになって、文学を激しく憎まないでいられることなど到底理解できません！文学が僕に教えることのできる究極で最善のことは、死を、その反対物の生へ到達させるひとつの可能性として捉えることです。僕が再び、まさしく文学によって閉じ込められてしまう時はもうすぐでしょうが、その日のことを考えるとぞつとします⁵⁶。」ここには、当時の文学に対するマンの態度や、作家として生きようとする彼の決意を読み取ることができるが、またそこには、執筆中の短編小説の中心テーマである「文学」についての方向性も暗示されている。文学についての自分の取るべき立場を学んだマンは、一気に、同じ手紙の終わりの方で、「ずっと以前から計画していた短編小説」の表題を、「美しくはないが、興味のある『文学』(Literatur)」という表題⁵⁷に変えることまで明らかにする。今やマンは、一八九九年の覚え書きに書いてからずっと持ち続けた『トーニオ・クレイガー』という表題を捨て、『文学』という表題を持ち出したのである。それは、この短編小説で「文学」のテーマを中心に据えようというマンの再確認であり、その後シュトルムの憂愁が追い込まれることを意味していた。しかし、この手紙の時点では、短編小説の中で文学についてのどのような構成で描くかの具体的な考えはまだなかった。それが、この手紙で彼が、「美しくはないが、興味のある『文学』という表題」を短編小説のために考え出しながら、その後に括弧して「ああ、怒りの涙よ！」(Ille lacrimae)と付け加えた所以であろう。

パウロとの友情によって前面に出てきた文学テーマ——しかし、この思いもすぐには動いていかない。「苦渋と憂愁を帯びた」第一章と第二章も書き始められたものの、小説の構想の広がりによって全体的な構成の修正を迫られ、執筆の速度も鈍りがちとなる。一月八日付けの兄ハインリヒに宛てた手紙でも、そのことが示されている。「今、私の書いているものは、『ジンプリチシムス』には長すぎ、そう急には完成しないでしょう⁵⁷。」また執筆の遅れには別の原因もあった。二月

四日にはすでに、S・フィッシャー出版社から、十月に『ブッデンブローク家の人々』を出版する旨と、この春には二つ目の短編小説集を出版したいという手紙が飛び込んでいたのである。先の十三日付けの兄への手紙には、すでにその短編小説集の出版を了承したこと、そしてそこに予想される作品として、これまで雑誌に発表してきた『墓地への道』『ルイスヒェン』『衣装戸棚』『しつぺ返し』の四つの短編小説に、『トリスタン』という表題になるはずの茶番小説と、『文学』という表題の短編小説が加わることが示されている⁵⁸。そしてそこには、今執筆中なのは『トリスタン』とある。その『トリスタン』が六月に、五月のフィレンツェ滞在が強い促しとなって短編小説『神の剣』が七月に避暑地の南チロルで完成し、さらに『ブッデンブローク家の人々』の二巻本初版が十月に出版された。確かに、五月に行われたフィレンツェやヴェネツィアへの旅は、文学のテーマに悩んでいるマンに、北方的な倫理性の深い感情と、イタリヤ的な良心のない冒険的な美 (bellezza) との葛藤という捉え方を徹底化させるのに大きな役割を果たすことになった。しかし彼は、十一月から十二月にかけて、七月にチロルの避暑地で知り合った医者のクリストフ・フォン・ハルトウンゲン博士 (Christoph von Hartungen) —— マンは消化器と胃に問題を抱えていた⁵⁹ —— のガルタ湖畔のリーヴァにある別荘「太陽館」に滞在しても、そこに『トーニオ・クレイガー』の「原稿を持って行ったにもかかわらず、一行も書き進めることができなかつた⁶⁰。』『トーニオ・クレイガー』は、一九〇一年二月の手紙で中心テーマが文学についての対話となることが明言されたものの、再び長いあいだ放置されて『トリスタン』や『神の剣』が書かれ、本格的に再度着手されるまでおよそ一年半を待たねばならなかつた。

マンのパウル・エーレンベルクとの友情は、『トーニオ・クレイガー』の表題を『文学』に変え、小説の中心に第四章の文学についての対話を置くきつかけをつくつたが、また一方ではその友情は、マンの中に「複雑でない人間関係への憧れ⁶¹」をもたらし、「苦渋と憂愁を帯びた」シュトルム風の第一章と第二章の描き方に大きな影響を与えることになった。元氣の良いパウルは、いつも堅苦しく物事を考えがちなマンを音楽に誘い、打ち解けた勇敢な青年に変えようとした。二人の友情は、相互に教え合つて教養を身につけようとする友情にとつて典型的なものであつたが、いつも彼らは馬が合うわけではな

かった。パウルに自分の肖像画を描いてもらい、また彼から絵画を学んだお返しに、マンは彼にニーチェに対する興味を起させようとしたが、トーニオがハンスにシラーを読ませようとして骨折るように、マンのその試みは成功しなかった。パウルはまた、ハンスのように「馬の絵」が好きで、好んでその絵を描いた⁶²。一九〇一年から翌年にかけて深まった二人のこうした非文学的体験について、マン自身、三月七日付けの兄宛の手紙で次のように書いている。——それは、しばしば現れるマンの同性に向けてのあけすけな愛の告白を同性愛的関係と捉えることに対する、彼自身の回答という関わりの中での文章であるが——「それは、恋愛という問題ではありません。少なくとも、普通の意味での恋愛ではありません。それは友情です。つまり、それは、——おお、驚嘆に値することですが——理解され、応えられ、報いられた友情です。ぶしつけに言えば、時として、とりわけ意気消沈や孤独に陥ったときには、いささか悩み過ぎるような性格を帯びる友情なのです⁶³。」

しかしこの友情体験は、必ずしも、執筆中の第一章にふさわしいものとは言えなかった。ふたりの精神的距離がかなり近く、あまりに幸福な関係でありすぎた。そこで、文学への衝動と素朴な人間関係への憧れ、それらの混ざり合った矛盾の感情は、『恋人たち』(Die Geliebten) という長編小説の素材となるよう準備されていった。しかしマンは、運良く、この友情をかつてのあのA・マルテンスへの感情と重ね合すことに成功し、そのためにその長編小説は放棄され、『トーニオ・クレージャー』の中にその友情ははめ込まれる。マンは後に「パウルに対する私の愛情は、破滅したあの金髪の学友に対する感情の復活とでもいうおもむきのものであった⁶⁴」と回想している。ハンス・ヴュスリング (Hans Wysling) が多くの資料を駆使して指摘しているように、マンのパウルとの友情は「アルミン・マルテンスとの友情の高められた繰り返し⁶⁵」であった。このようにして、一九〇一年から翌年の冬にかけてのパウルとの昂まった友情は、かつてのA・マルテンスとの友情に上塗りがかかるように、短編小説の「苦渋と憂愁を帯びた」初めの二つの章に結晶することになる。しかし次第に、マンとパウルの友情も、表面的には親密な感情に支えられていたものの、実際にはすでに変化を見せ始めていた⁶⁶。「この冬、私は仕事をしないでもっぱら体験して過ごしました。非常に人間的な体験でしたが、ノートにいったいどの観察を書き留めることで

私の良心を静めたのでした⁶⁷。」こう書いたのは一九〇二年六月二日のことであつたが、マンの『トーニオ・クレীগー』に對する比重はこの冬の時点ですでに、「苦渋と憂愁を帯びた」二つの章を通り過ぎ、文学の問題に大きく傾いていたのである。

マンの第七の覚え書き帳には、多くの『トーニオ・クレীগー』のための書き込みがあるが⁶⁸、この短編小説が本格的に書き始められるまでには、さらに随分と待たねばならない。そのことは、一九〇一年十月に『ブッデンブローク家の人々』が出版され、市場に一回つたことと關係があつた。多くの読者は、とりわけ故郷リユーベックの読者は、この本を一種のモデル小説と見なし、登場人物の中に自分たちの姿を見付けて憤慨したが、読者のこの反応においてまさしくマンは、『トーニオ・クレীগー』の創作のキーワードを、つまり、芸術家と市民は違つた感情を持ち、両者は對立的關係にあることをはっきりと理解したのであつた。そのような事実が明確になることによつて、中心テーマとしての文学の描き方も新しい展開を迎え、それまであつた内容は変更を余儀なくされる。『トーニオ・クレীগー』の執筆はゆつくりと進むように進んでいく。『略伝』は次のように記している。「私は非常にゆつくりと書いた。特に、抒情的なエッセイといふべき中心の部分、すなわち、ロシアの女友達(全くの作り物だが)との会話には数ヶ月もかかつた⁶⁹。」この時『トーニオ・クレীগー』は具体的に、「市民的北ドイツ的感情のふるさとと、芸術と精神の厳しくて冒險的で冷たく熱狂的な世界との、ひとつの胸の中に生きるせめぎ合いを主題とする一編の抒情的短編小説⁷⁰」の性格を帯びるようになっていった。

一九〇二年六月に出したマンの二通の手紙は『トーニオ・クレীগー』の執筆の苦悩のさまを表現しながら、それがつびきならないところに来てゐることを明らかにしている。六月一日付けのパウル・エーレンベルク宛の手紙は次のように報告している。「僕も仕事をしている。……といふことはつまり、もたもたしながら、時にはほとんど耐えられないくらい、疑惑、躊躇、それに、芸術家としての良心の貪婪さと過度の敏感さとに苦しめられてゐるわけだ。心身を焼き尽くすほどの功名心とこれほどの神経性の怠惰とが、またこれほどの情熱(これは「情熱性」とは別物だ)とこれほどの不器用さとが、

悲劇的に同居している芸術家など滅多にないだろう。しかも、時間的余裕はほとんどない。この秋に出版予定の短編小説集を本屋では夏のうちに印刷してしまいたいと言っているのに、作品の方はまだ完成していないのだから⁷¹。」ここには、マンの『トーニオ・クレーガー』の執筆のために、特に第四章に予定している文学のテーマに難渋している様子が顕著である。また、六編を収録する予定のマンの第二の短編小説集(後に表題『トリスタン』となる)のために、短編小説『文学』(後の『トーニオ・クレーガー』)だけが完成していなくてせっぱ詰まっていることが述べられている。そのことを、その翌日の二日付けのK・マルテンス宛の手紙は、「私も、今再び、仕事にかかり初秋に出版予定の短編小説集の補充に努めています⁷²」と表現している。この「補充」に当たっている作品を、H・ビュルギン (Hans Birgin) とH||O・マイヤー (Hans-Otto Mayer) 作成のトーマス・マン年譜は、『トーニオ・クレーガー』か『神の剣』であるのか不明としているが⁷³、『神の剣』がすでに完成していること、そしてこの二通の手紙との関係からも、『トーニオ・クレーガー』であることは明らかである。漸く夏になって、『トーニオ・クレーガー』の最終段階の執筆が本格的になると、『トーニオ・クレーガー』の中間部分の文学についての対話に苦悩していたマンは、小説の中の一章として構想していた部分をその中に納めきれず、それを一気に別の短編小説に仕立てるために、『トーニオ・クレーガー』を一時、脇に追いやるのである。この短編小説とは、翌年一月に雑誌「未来」(Die Zukunft) に発表された『トーニオ・クレーガー』のための一種の習作⁷⁴と呼ばれる『飢えた人々』である。マンは、この短編小説を書き終えたとき、いつものように体調は良くなかった。少なくとも、彼はそう思っていた。不規則な食習慣によるところが大きい神経性の胃痛だった。彼は春の終わる頃には、再びフォン・ハルトウンゲン博士のいるリーヴァを訪ねることを考えていて、十月二日から十一月半ばまで、実際、彼のもとで過ごしている。彼の指示に従って、マンはここで静かで単調な日々を送った。前年の十一月から一ヶ月半のあいだに、ここに滞在したとき博士に命ぜられていた書くことの禁止を今回は少し緩めることを許され、彼は、今回も持ち込んでいた『トーニオ・クレーガー』の執筆に午前中の数時間を与えることができた。前回滞在時には「一行も書き進めることができなかった」

が、今回は「普通よりも数行多い程度」の進展ぶりであった。「そのうえ私は仕事をしています。非常に慎重に、普通より数行多い程度にしか進みませんが、それというのも、私の予定しているもの(比較的長い短編小説)が、またもやひどく厄介で、ひどく時間がかかりそうだからです。しかし実際はせきたてられています。新しい短編小説集は、この最後の作品以外、もう校正刷りとなって私の目の前にあり、しかも今度の作品は以前からすでに、雑誌『ルントシャウ』に載ることが決まっているのです。(……)『トニーオ・クレীগー』という表題のこの新しい短編小説は⁷⁵⁾。」この手紙では、予定している仕事の中の「比較的長い短編小説」の表題が、前年初めに『文学』という表題に変えられてから再び『トニーオ・クレীগー』に戻っていることも注目すべきだが、それにも増して、ここで彼が、『トニーオ・クレীগー』に關わって仕事をしながらも他の書物も読んでいることに注意が必要だろう。『イエレン・ウール』(Jon Uhl)に私は魅了されました。この小説の嚴肅さとユーモアの混じっていると注意が必要だろう。今、私はずつとヘルマン・バング(Herman Bang)を読んでいますが、それに私はとても親近感を感じています。ぜひ、彼の『ティーン』(Tine)を読んでみて下さい⁷⁶⁾。」ヴユスリングは、トニーオがあゝの短編小説の中で、故郷の大衆図書館で本をべらべらめくっているのは、おそらくこのバングの『ティーン』(一八八九年)であろうと推測し⁷⁷⁾、さらに次のように指摘している。「最後の数章(「北へ」)の、子供時代の故郷への旅)において、トーマス・マンは、すでに最初、ダンス講習会の章で風刺的な光を帯びながらも輝いていたあの北方的な感情音を再登場させることができた。ヘルマン・バングの憂愁を帯び、かつ皮肉的なこの本の終盤の部分は、音調において、トーマス・マンの試みたシュトルムとニーチェの統合に全く適ったものだった。それは、最後の数章を執筆するマンに連れ添ったのである⁷⁸⁾。」また、この時期、マンがこの短編小説を書き進めるのに苦悩したのは、第一章や第二章の子供時代の描写に溢れているシュトルム風の北方的な感情の温かさと、第四章のニーチェに学んだ心理学的で冷静な作家としての分析との間に生じる文体のずれをなくすことだった。どうかそれは、移行の章としてあたに第三章と第五章を挿入することで免れることができたが、それも、リーヴァのフォン・ハルトウンゲン博士のもとで過した際の、彼のバングの本の読書によるものだった

た。

しかし、『トーニオ・クレীগー』は、リーヴァにおいても完全には終わらなかつた。十一月半ば、その地からミュンヘンに帰つて数週間後、十二月も半ば近くになつて漸く、短編小説『トーニオ・クレীগー』は完結する。それは、発表を予定していた雑誌の印刷に間に合わせるのにぎりぎりだつた。このような長い経緯を経て、『トーニオ・クレীগー』は雑誌『ノイエ・ドイチュ・ルントシャウ』の一九〇三年二月号（二一三一—五二頁）に発表され、また、その後すぐの三月にベルリンのS・フィッシャー出版社から、初版二〇〇〇部のマンの第二の短編小説集『トリスタン』の悼尾を飾る（一六三—二六四頁）作品として出版された。この短編小説集には「詩作すること、それは自分自身を裁くことである」という標語がつけられ、表紙には、当時、マンがミュンヘンで親交のあつたアルフレート・クービン（Alfred Kubin）の「憂鬱でグロテスクなカバー絵⁸⁰」が描かれた。しかし、その絵は一九〇三年末の第二版の短編小説集の発行の際には、作者マンの「美しく、純粹に裝飾的な絵」という希望に應えて、カール・シュネーベル（Carl Schnebel）のかなり質素な絵にすり替えられた⁸¹。

以上、『トーニオ・クレীগー』の成立の経緯について長々と考察したが、拙稿の論文の冒頭で述べた作品成立の困難は具体的に実証されたはずである。またその困難さは、『トーニオ・クレীগー』の成立に要した期間が三年以上、或いは四年にもなり、あの長編小説『ブッデンブローク家の人々』よりも長いことから証明できよう。こうした困難さは、この作品の受容の輝かしさから往々にして忘れられがちであるが、マンが自分の短編小説の中でこの作品ほど時間と労力を使った作品もなかつたことを、私たちは知っておくべきであろう。それは、マン自身のこの短編小説に対する意気込みにも繋がっている。彼が『トーニオ・クレীগー』を「私の書いたものの中では自分の心に一番近い作品である」と言い、「私の文学的寵児」と見なすのも、『トーニオ・クレীগー』の創作の苦悩の大きさを説明しようとする表現に他ならない。

- の言葉を集めた代表的なものには次のものがある。 Hans Wysling (Hersg.): Thomas Mann Teil 1: 1889-1917 (Dichter über ihre Dichtungen, Bd.14/1) S.141-177.
- 13 XI.S.381. (Lübeck als geistiger Lebensform)
- 14 XI.S.115. (Lebensabriß). なお、この『略伝』と似た表現が構想の時期から四十年の歳月を経たプリンストン大学での講演『自分のこと』にもある。『トーニオ・クレーガー』の構想は、『ブッデンブローック家の人々』を書いていた時期に遡り、デンマークのズント海峡に面したある海浜保養地への旅と関わりがあった。その旅は、確かに、小説の中でもひとつの役割さえも演じている。この旅が体験の核となって、様々な関連をもつその小さな文学作品が結晶した。』 XIII.S.144. (On Myself)
- 15 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main,1962, S.11.(1899,7,8)
- 16 Hans Wysling (Hersg.): Thomas Mann Teil 1:1889-1917 (Dichter über ihre Dichtungen, Bd.14/1) S.141.
- 17 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.12.
- 18 »inkognito« 或は »incognito«. Hans Rudolf Vaget: Thomas Mann Kommentar, Winkler Verlag, München, 1984, S.109.
- 19 このホテルでは、当時 Töpfer-Seehase が支配人をつとめた。 Peter de Mendelssohn: Der Zauberer Das Leben des deutschen Schriftstellers Thomas Mann. Erster Teil 1875-1918, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1975, S.362.
- 20 Hans Rudolf Vaget: Thomas Mann Kommentar, S.109.
- 21 Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, Philipp Reclam Jun.,Stuttgart, 1983, S.39.
- 22 Hermann Wiegmann: Die Erzählungen Thomas Manns, Aisthesis Verlag, Bielefeld, 1992, S.104.
- 23 XI.S.381. (Lübeck als geistiger Lebensform)
- 24 Peter de Mendelssohn: Der Zauberer, S.364.

- 25 XI.S.124. (Lebensabriß)
- 26 オトー・グラオトフはリューベックのある書店主の息子で、後に著述家、芸術史家になった。二人はカタリーネウム実科学校時代に友情を結び、それはミュンヘン時代まで続く。一九〇一年までの二人の往復書簡が残っている。学友雑誌『春の嵐』の共同刊行者。「わが友オトー・グラオトフに」として『ブッデンブローク家の人々』第十一部が捧げられている。
- 27 Thomas Mann: Briefe an Otto Grautoff 1894-1901 und Ida Boy-Ed 1903-1928, S.123. (1900.9.9)
- 28 Hermann Wiegmann: Die Erzählungen Thomas Manns, S.104.
- 29 Peter de Mendelssohn: Der Zauberer, S.364.
- 30 Thomas Mann: Briefe an Otto Grautoff 1894-1901 und Ida Boy-Ed 1903-1928, S.109.
- 31 Hans Rudolf Vaget: Thomas Mann Kommentar, S.109.
- 32 メンテルスブーン (Peter de Mendelssohn: Nachbemerkungen zu Thomas Mann 2, S.32. Peter de Mendelssohn: Der Zauberer, S.364.) や、スルマン (Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, S.54) は、オールスロー滞在中のこともしれないと言っている。
- 33 第三の覚え書き帳。マンの残した『トーニオ・クレイガー』に関する覚え書きは、様々な型紙で十五枚になるが、そのほとんどは、文学についての会話とトーニオのデンマークへの旅についてのものである。これらは一八九九年の第三の覚え書き帳と一九〇一／〇二年の第七の覚え書き帳として集められている。(Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, S.44).
- 34 Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tonio Kröger<, in: Paul Scherrer / Hans Wysling: Quellenkritische Studien zum Werk Thomas Manns, (Thomas Mann Studien 1), Francke Verlag, Bern und München, 1967, S.49. 原文は次のとおり

りておる。

Tomio Kröger

Manche gehen mit bewußter Notwendigkeit in die Irre, weil es einen richtigen Weg für sie überhaupt nicht giebt.

T.K. vom Temperament sanftmütig und gütendekend, von der psychologischen Erkenntnis aufgerieben.

«Nun, wie denn, Bartschka...» (Väterchen)

35 最初のメモは第三章の冒頭ページのフィッシュヤー版トーマス・マン全集の二八八頁、二二二頁は第四章三〇〇頁、最後のものは第四章二九六頁と第五章冒頭三〇五頁である。

36 Peter de Mendelssohn: Der Zauberer, S.365.

37 C.A.M.Noble: Krankheit, Verbrechen und künstlerisches Schaffen bei Thomas Mann, Verlag Herbert Lang & Cie AG, Bern, 1970, S.107.

38 Thomas Mann: Briefe an Otto Grautoff 1894-1901 und Ida Boy-Ed 1903-1928, S.110.

39 XI.S.620. (Unordnung und frühes Leid)

40 Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tomio Kröger<, S.49.

41 拙稿『若いトーマス・マン(八)——小説と小説家のあいだ』、『山口大学文学会志』第五十一巻、二〇〇一年、七頁。

42 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.19.

43 »neue Novelle bitter-wehmütigen Charakters«. Ibid.,S.20.

44 XI.S.100. (Lebensabriß)

45 Ibid.

46 Ibid.

- 47 Thomas Mann Briefe 1948-1955 und Nachlese, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1965, S.387. (1955.3.19)
- 48 »Stimmungsnovelle«. Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tonio Kröger<, S.62.
- 49 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.25.
- 50 Thomas Mann / Heinrich Mann Briefwechsel, S.Fischer Verlag, Berlin und Weimar, 1969, S.15.
- 51 Richard Winston: Thomas Mann Das Werden eines Künstlers, Albrecht Kraus Verlag, München und Hamburg, 1981, S.195.
- 52 XI.S.107. (Lebensabriß)
- 53 Richard Winston: Thomas Mann Das Werden eines Künstlers, S.196.
- 54 トニオ・クローガー 一九〇一年二月十三日、三月七日の兄ハインリヒ宛の手紙や、一九〇二年二月二十八日のパウルへの手紙
トニオの監獄生活等。(Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tonio Kröger<, S.51.)
- 55 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.25.
- 56 Ibid., S.26.
- 57 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.23.
- 58 Ibid., S.26.
- 59 Richard Winston: Thomas Mann Das Werden eines Künstlers, S.203.
- 60 XI.S.115. (Lebensabriß)
- 61 Richard Winston: Thomas Mann Das Werden eines Künstlers, S.197f.
- 62 Hermann Wiegmann: Die Erzählungen Thomas Manns, S.104, Hans Rudolf Vaget: Thomas Mann Kommentar, S.110.
- 63 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.27.
- 64 XI.S.107. (Lebensabriß)

- 65 Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tonio Kröger<, S.62.
- 66 Richard Winston: Thomas Mann Das Werden eines Künstlers, S.228.
- 67 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.33.
- 68 Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tonio Kröger<, S.55. なお、この覚え書きや帳の最後で初めて「トニー
 木の友人の名前はターゲからハンヌ・ハンゼンに変わる」。
- 69 XI.S.115. (Lebensabriß)
- 70 XI.S.247. (Theodor Storm)
- 71 Thomas Mann Briefe 1948-1955, S.436.
- 72 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.33.
- 73 Hans Bürgin/ Hans-Otto Mayer: Thomas Mann Eine Chronik seines Lebens, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1965,
 S.23.
- 74 »neine Art Vorstudie zum Tonio Kröger«. Thomas Mann / Heinrich Mann Briefwechsel, S.73. (1909.3.25)
- 75 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.35. (1902.10.16)
- 76 Ibid., S.36.
- 77 Hans Wysling: Dokumente zur Entstehung des >Tonio Kröger<, S.62.
- 78 Ibid., S.63.
- 79 »Dichten, das ist Gerichtstag über sich selbst halten.«
- 80 XI.S.108. (Lebensabriß)
- 81 Hans Wysling (Hersg.): Thomas Mann Teil 1:1889-1917, S.172.

三 『トーニオ・クレীগー』の受容

『トーニオ・クレীগー』を発表した一九〇三年二月、マンは二十七歳になつていた。この短編小説は、構想から四年近くの長い年月を経て苦悩の末に書き上げた作品だったが、この作品に対してマン自身、それほど自信があるわけでもなかった。二年前、「無名の青年作家の不恰な作品に、多くの金をかけようなどという気を起こす者など一人もいないだろう⁸²⁾」と考へて発表した長編小説『ブッデンブローク家の人々』は、予想に反して人々に喜んで迎えられ、当時すでに賞賛の声とともに次々に版を重ねていた。しかし、苦悩の末に今回発表した『トーニオ・クレীগー』には明らかな欠点も目立ち、彼自身、芸術的な胡散臭さも感じていた。これは、描写でなく報告に過ぎない、あまりに目的に向かつて意識的に書かれすぎている綱領小説だ、思想や観相、モチーフ、形象、状況の反復に過ぎない、という思いが彼にはあつた。従つて、研究者たちのこの短編小説についての弱点や不備の指摘——例えば、「『トーニオ・クレীগー』の構造を形成しているのは、形象以前の原状況の繰り返しに過ぎない⁸³⁾」（ヘルマン・クルツケ）や、「この作品のすべての章は弱みを持つ。『ウェニスに死す』或いは『マリーオと魔術師』、そして初期の作品『トリスタン』といった短編小説とは、『トーニオ・クレীগー』は——トーニオ・マンがこの短編小説ほど長いあいだ関わつた短編小説は他にないというものの——叙事的作品としてみれば比喩ものにならない。マン自身がこの物語の決定的な弱みを極めてよく承知している⁸⁴⁾」（ラニツキ）——に、作品発表直後のマンもおそらく異論はなかつたろう。また拙稿の冒頭に挙げた、ヴァルザーのイロニーにまつわる否定的評価も、マンには決して甘んじて受け入れられないものでもなかつた。彼自ら、作品発表後しばらくして、この作品の不備なところを次のように表現している。「『トーニオ・クレীগー』には生に対する愛情告白が書き込まれているが、その愛情はあまりに明瞭直截すぎて、非芸術的なところにまで達している⁸⁵⁾。」確かに否定的に見れば、『トーニオ・クレীগー』はどうにもならないほど不完全な作品に映るかもしれない。必ずしもゲーテの定義する「生起した前代未聞の出来事」(eine ereignete unerhorte Begebenheit) が語られている短編小説でもないし、抒情詩風ともバラード風とも言えない。だからだとしたただ単なるエピソード

ソードの羅列にすぎないと言えるかもしれない。そのうえまた、エッセイ風なところもあり、そうした表白で作品は終わっている。「筋というものがなく、また本質的に展開というものがない。むしろ心象風景と精神状態の描写がみられ、それらが多かれ少なかれ、つかの間の告白や反省、そしてとりわけ、理論的で大抵は美学的な問題への論究と混じり合っている」⁸⁶——こんな否定的評価に誰しも頷くことができよう。

しかし、今回も予想は見事に外れた。雑誌に発表直後の二月五日にベルリンの出版協会の招きで行われた『トーニオ・クレージャー』の朗読の際すでに、マンはこの短編小説に対する好意的な感触に気付いていた⁸⁷。しかし、人々がすぐにも、「この作品に飛びつき、『ブッデンブローク家の人々』の分厚い二巻本よりもこの九十頁の方を好む」など思いもしなかった。だが、短編小説集『トリスタン』の中でも『トーニオ・クレージャー』だけは、発表直後から際だって好評だった。それは一様に、「自然発生的で、全般的に喜びに溢れた、熱狂的賛同に満ちた」⁸⁸ものであり、この短編小説は「他の短編小説を超える、思想の深さと芸術的な価値をもつ作品」⁸⁹であると高い評価を受けた。作品発表直後の反響は、ヴェルナー・ベルマン(Werner Bellmann)の『「トーニオ・クレージャー」論』やクラウス・シュレーター(Klaus Schrüfer)の『トーマス・マンに関する当時の見解』に詳しいが⁹¹、ここでは「熟した、深い、価値のある、完璧な」⁹²といった賞賛の形容詞がこの作品に被されている。例えば、文学史家ハインリヒ・マイアー＝ベンファイ(Heinrich Meyer-Bentley)の「疑いなく、マンの書いた作品の中で最も熟していて深いもの」⁹³や、エデュアルト・ゴルトヴェク(Eduard Goldweck)の「短編小説集の中で最も熟した短編小説で、完璧な芸術作品」⁹⁴という日刊紙の言葉など、この作品に対する多くの批評を最も端的に特徴づける表現であろう。また文学批評家たちは、『トーニオ・クレージャー』にマンの作家としての決意表明を読み取り、それを高く評価した。彼らはこの短編小説に描かれた作家誕生の展開に同調し、トーニオの「自己告白」や「自己分析」「自画像」「個人的な信念」「生の告解」に理解を示し⁹⁵、マンの作家として将来性に期待した。さらに、作品の最後にある、「私はもつとより良いことをするでしょう」というトーニオの約束を信じ、マンを将来のドイツ文学の「期待の星」⁹⁶とさえ見なした。

しかし、『トニーオ・クレীগー』に魅了されたのは、文学批評家たちばかりではなかった。多くの著名な作家たちもこの短編小説を何度も心して読んだ。その最たる作家はカフカであろう。マックス・ブロートは、友人カフカについて、彼は「トーマス・マンの『トニーオ・クレীগー』が好きで、『ノイエ・ルントシャウ』誌にこの作家が書いたものは一行残らず丹念に探し出して読んでいた⁹⁷」と書いた。また、一九〇四年にはすでに、カフカはブロートに宛て、「私は今、『トニーオ・クレীগー』を再び読みました」と書き送っている⁹⁸。文学批評家たちの、カフカと『トニーオ・クレীগー』に関する発言も目につく。シュレーターは、カフカを「『トニーオ・クレীগー』以降、トーマス・マンの著作に飢えている数少ない作家の一人⁹⁹」であると言いい、ラニツキは、カフカは『トニーオ・クレীগー』のなかに自分の問題を見て取っていたと指摘した¹⁰⁰。また、カフカ研究者のハインツ・ポリツァー(Heinz Polizer)は、一九〇四年をカフカにおける『トニーオ・クレীগー』時代と呼び、カフカにおける、特に芸術と芸術家の存在や社会との関係を主題とする彼の最後の小説『断食芸人―四つの物語』における若きマンの影響を極めて高く評価している。「カフカはここで、トーマス・マンが世紀の初めに『トニーオ・クレীগー』で展開したような美学に立ち返ろうとしているようだ¹⁰¹」またその他にも、この短編小説に魅了されて再読した作家や文学批評家には、日記の中でそのことを記しているアルトゥール・シュニツラー、自分の創作のモチーフがこの作品によつて「核心的に定義された」と考えたジョルジュ・ルカーチらがいる¹⁰²。

マンにとって思いも寄らぬ、『トニーオ・クレীগー』に対する高い評価は、文学批評家や作家たちばかりでなく、広範囲の大衆読者からも寄せられた。マンは一九〇四年七月二十一日のゲッティンゲン「文学協会」での朗読会のことを回想して、後に次のようなエピソードを紹介している。「当時ゲッティンゲンの大学生で痩せて神経質そうな顔をしていた青年は今どこにいるのだろうか。この青年は、朗読会の後、みんなでミュッツェの酒亭で飲んでいたとき、甲高い興奮した声で、私に、へたぶんご存じでしょうね、ご存じのはずだ、——『ブッデンブローク家の人々』があなた本来の仕事ではない、あなた本来の仕事は、『トニーオ・クレীগー』ですよ、と言ったものである¹⁰³。」このように、『トニーオ・クレীগー』に

対する文学批評家や作家たち、大衆読者の「愛」は、少なくとも否定されることはなかった。短編小説『トーニオ・クレীগー』はその後、一九一三年にはエーリヒ・M・ジーン (Erich M. Simon) の十八枚の挿絵付きの単行本が、一九五二年にはフィッシャー出版社の教科書版が、一九六〇年には同じフィッシャー出版社から十二巻の全集が、一九七三年にはポケット版が発行され、次々と版を重ねていった¹⁰⁴。外国の読書界でも、マンは『トーニオ・クレীগー』でもって初めて注目される作家となった。この短編小説は、一九〇五年にデンマーク語に翻訳されたのを皮切りに様々な外国語に翻訳され¹⁰⁵、一九二八年以降、ドイツ語の注釈付きや語彙付きの教科書にもなった¹⁰⁶。また、外国の小説家への影響も大きかった。例えば、トーニオを身内だと感じ、自分に似ていると思ったフランスの女流作家ナタリー・サロート (Nathalie Sarraute)、『この物語に新しい今日性を感じたポーランドのノーベル賞作家チェスワフ・ミウオシユ (Czeslaw Milosz)』、トーニオを愛し続けたと、高校生のときからの一貫した思いを熱く告白したハンガリーの抒情詩人ジェルジュ・コンラード (György Konrad)、『トーニオから「行動の規範や心的生き残りの手引き」を得たという、当時東ドイツ在住の作家兼エッセイストのギュンター・デ・ブルイン (Günter de Bruyn)』、この短編小説を賛美し、模倣さえ試みたアメリカの作家フィリップ・ロート (Philip Roth)。
 ——『トーニオ・クレীগー』の大きな影響は、第一次世界大戦以前のドイツ語圏の作家たちに限らない¹⁰⁷。

以上、『トーニオ・クレীগー』の、国の内外を問わぬ広範な大衆読者たち、文学批評家たち、作家たちによる輝かしい人気と高い評価について具体的に見てきた。作品発表の一九〇三年直後から、『トーニオ・クレীগー』は好意的に迎え入れられ、この短編小説を読むことは文学界の一般的風潮としてしばらく続く勢いであった。

82 XI.S.113. (Lebensabris)

83 Hermann Kurzke: Thomas Mann Epoche—Werk—Wirkung, Verlag C.H.Beck, München, 1991, S.100.

84 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung > Tonio Kröger <, S.100.

- 85 Thomas Mann Briefe 1889-1936, S.61. (1906.3.28)
- 86 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.94.
- 87 Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, S.59. エーレンベルク兄弟宛の一九〇三年二月八日付けの手紙で「二月五日に『トーニオ・クレーガー』の作者として非常に丁寧に迎えられたことを、差出人「トーニオ・クレーガーより」として報告してゐる (Thomas Mann Briefe 1948-1955 und Nachlese, S.442)。また「そのときのことを後にも『トーニオ・クレーガー』は(……)ヘルリンの文学界で非常に好評を博した」(XI.S.115. Lebensabriß) と回想してゐる。しかし「この二月五日は、ただら・フィッシュャーを訪問しただけで、正式な朗読はなかつたのかもしれない。『トーニオ・クレーガー』の朗読を十月と記した年譜ゆゑ」(Hans Bürgin/ Hans-Otto Mayer: Thomas Mann Eine Chronik seines Lebens, S.25. Hans Wysling (Herg.): Thomas Mann Teil I:1889-1917, S.753.)
- 88 XIII.S.92. (Betrachtungen eines Unpolitischen)
- 89 Hans Rudolf Vaget: Thomas Mann Kommentar, S.116.
- 90 Martin Neubauer: Thomas Mann Tonio Kröger, Philipp Reclam, Stuttgart, 2001, S.55.
- 91 Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, S.59-72. Klaus Schröter: Thomas Mann im Urteil seiner Zeit. Dokumente 1891 bis 1955, Christian Werner Verlag, Hamburg, 1969.
- 92 »reif, tief, wertvoll, vollendet«. Hans Rudolf Vaget: Die Erzählungen, in: Hermut Koopmann(Herg.): Thomas Mann -Handbuch, Alfred Kröner Verlag, Regensburg, 2001, S.564.
- 93 一九〇四年三月二十二日の新聞「アルゲマイネ・ツァイツング」紙付録文芸欄の Heinrich Meyer-Benfey の記事。(Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, S.68)
- 94 一九〇四年四月十一日の新聞「ライプツヒツヒツ」紙「余録」の Eduard Goldveck の記事。(Ibid., S.69)

- 95 Hans Rudolf Vaget: Thomas Mann Kommentar, S.11f.
- 96 VIII. S.338. (Tonio Kröger). »Hoffnungsträger« (Martin Neubauer: Thomas Mann Tonio Kröger, S.55)
- 97 Max Brod: Über Franz Kafka, Fischer Bücherei, Frankfurt am Main, 1966, S.46.
- 98 Franz Kafka: Briefe 1902-1924, in: Gesammelte Werke (Herg. Max Brod), S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1958, S.31.
- 99 Klaus Schröter: Thomas Mann in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Rowolt Verlag, Hamburg, 1964, S.81.
- 100 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.101.
- 101 Heinz Politzer: Franz Kafka der Künstler, S.Fischer Verlag, Güstertlohn, 1965, S.435.
- 102 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.101, S.104. Martin Neubauer: Thomas Mann Tonio Kröger, S.55.
- 103 XII. S.90f. (Betrachtungen eines Unpolitischen)
- 104 Werner Bellmann: Thomas Mann Tonio Kröger, S.71.
- 105 Ibid. ロシア語(一九一〇年)´ハンガリー語(一九一三年)´スエーデン語(一九二二年)´フランス語(一九二四年)´イタリア語(一九二六年)´オランダ語(一九二七年)´日本語(一九二七年)´ブルガリア語(一九三〇年)´ヘブライ語(一九三二年)´スペイン語(一九四五年)´トルコ語(一九四五年)
- 106 Thomas Mann Briefe 1948-1955 und Nachlese, S.387. (1955.3.19)
- 107 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.102f. Martin Neubauer: Thomas Mann Tonio Kröger, S.55.

四 『トニーオ・クレীগー』の高い人気と肯定的評価の理由

(一) 抒情性、音楽性

では、『トニーオ・クレীগー』がその高い人気と肯定的評価を得たのは何故なのか。取り立てて問題にするほどの筋もなく、小説としての筋立ても大変地味なこの短編小説のなだが、若者たちの心を捉えたのであろうか。そのことを具体的に考えてみたい。マンが後に端的に書いている文章を、まず見よう。『トニーオ・クレীগー』は非常に温かく迎えられました。この小説は（……）若々しい青春の抒情詩を含んでいるという長所があるし、純粹に考えると、読者多数の共感を得たのは音楽的性質のおかげかもしれません。¹⁰⁶『トニーオ・クレীগー』における抒情性、音楽性——この二つの面は、確かに、作品の文体や形式まで包み込み、作品全体の雰囲気醸し出している。作品の冒頭の文章——「冬の太陽は雲の層におおわれて乳色にぼやけたまま、ただ貧弱な薄明かりになって、狭い町の空にかかっていた。破風造りの家々に挟まれた小路は湿っぽく風が吹きさらしていたが、時々、氷でもないし、雪でもない、みぞれのようなものが降ってきた。¹⁰⁹」——からすでに、北国特有のかげりのある抒情的雰囲気溢れ、音楽的でさえある。こうした、シュトルム的で北方的な、甘く切ない抒情性や音楽性は、作品全体に基調音として根を張っていて、誰にとってもこの短編小説に惹かれる最初の動機であろう。さらに音楽的効果は、ライトモチーフの技法による文章のリズミカルな繰り返しによって、さらに高まっている。「とりわけ『トニーオ・クレীগー』では、言葉によるライトモチーフが、『ブッデンブローク家の人々』の場合のように単に人相的自然主義的に扱われているのではなく、観念的な感情の透明さを獲得していて、これは作品の機械化を防いで音楽的なものへと高めているのであった。¹¹⁰『トニーオ・クレীগー』は「二つの楽章で構成された悲歌¹¹¹」と呼ばれるように、作品全体が提示部、展開部、反復部の古典的ソナタ形式によつて構成されていることは誰もが確認できよう。¹¹²マンはしばしば、創作を作曲と同一視して「私の小説」という代わりに「私の音楽」と言い、この短編小説についても「散文バラード」(Prosa-Ballade)と呼び、「あの長大な長編小説という自家製のヴァイオリンで演奏されたリート¹¹³」と名付けた。しかも

『トーニオ・クレীগー』は、「音楽を創作中に取り入れて、文体や形式を形作らせた」¹¹ 最初の作品であったが、確かに、この小説ほど、音楽的に構成された彼の作品は他にないであろう。この短編小説の、作者マンの意図した音楽性が人々を魅了したのも当然である。マンの作品の登場人物たちは、ハンノー・ブッデンブロークからアドリアン・レーヴァーキューンにいたるまで、つねに音楽と結びついているが、『トーニオ・クレীগー』が人々を魅了したのは、音楽による構成技法、つまり、リヒアルト・ヴァーグナーの音楽を小説の展開に活用したことにあることは十分に頷ける。¹⁵

『トーニオ・クレীগー』は、「短編小説 (Novelle)」と銘打つてあるものの、ゲーテの定義した「生起した前代未聞の出来事」はなにひとつなく、作品の最後で主人公のトーニオが「事件を物語るよりも、一般的なことをうまく言ってみることを好んで行おうとした」¹⁶ と言うように、短編小説というよりは散文詩に近い。そう指摘したのは、エーリヒ・ヘラー (Erich Heller) であるが、彼はさらに、この短編小説の注目すべき点として、「極度に問題的な精神状態を抒情的で単純なものに解明し、すべての挿話や省察に平明な詩的な情緒による統一を与える手腕」を挙げている。¹⁷ マンは一九四〇年の講演『自分のこと』においても再度、『トーニオ・クレীগー』が青春の抒情性という点において、最も近縁な関係にある『ヴェニスに死す』よりも優れていること、さらには、人々の共感を得た理由がその音楽性にあることを述べている。『トーニオ・クレীগー』においてはじめて叙事詩的構成が、後年、さらに大規模ではありますが、『魔の山』の場合にも見られたように、様々な主題による精神的な組織網として、交響乐的な関連の複合体として、理解されるにいたりました。とりわけ『トーニオ・クレীগー』においては、言語的な (ライトモティーフ (主導動機)) が、いまだ『ブッデンブローク家の人々』においてはそうした嫌いがあつたのに引き換えて、もはや単に自然的に、全く外面的な叙述として操作されていなくて、そのライトモティーフを非機械化し、音楽的なものにまで高める、いわば観念的な感情の透明性を獲得していたわけだ。¹⁸

(二) 青春の痛み——自分の非婦属性を解決できない人の「詩的ハンドブック」

『トーニオ・クレীগー』が人々に共感を与えた理由としてマンの挙げた「青春の抒情性」とは、また、彼が晩年のある講演の中で『トーニオ・クレীগー』について、「この小説の若々しく抒情的な痛みは不思議なことに、半世紀の間新鮮に保たれ、世代間の交替の中でいつも新たに若い心の共感を得てきたのである」と述べたように、抒情的な青春の痛みの表現でもあった。この短編小説は青春物語として読まれ、青春を生きる若者トーニオの痛みは若者たちの痛みを表現してくれるものであった。若者たちは、トーニオに自分の生き方を投影し、そこに自分のアイデンティティを見出した。読者に様々な読み方を促す『トーニオ・クレীগー』——その人気の秘密のひとつは、そこに、そうした青春を生きる若者たちの心が生々しく如実に洞察され、若者の生が感動的に報告されていることにあった。とりわけ、精神的で知的な世界において傷つく若者たちは、トーニオの内面世界に自分のアイデンティティを呼び起こすことができた。彼らは『トーニオ・クレীগー』を、自分たちの心を表現してくれる特別な意味の青春小説として読んだのだった。例えば、トーマス・マンについての浩瀚な伝記を著しているクラウス・ハルププレヒト (Klaus Harpprecht) は、かつての青年時代を回想して次のように書いている。「九十年前から限らないほどの数の文学好きの高校生たちが、本当に、この《抒情的短編小説》を夢中になって読んできた。ひそかに詩を書いているような多くの恭しい若者たちは、トーニオ・クレীগーへの傾愛において自分の痛みを認識したのである。涙にヴェールするような眼差しで、本当に高貴な諦めの気持ちをもって、自分のハンス・ハンゼンや自分のインゲ・ホルムを見詰めた者も多い。かなり多くの者が、自分自身の欲求を、《生と芸術》に理想化された悲劇的な緊張の中に見ようとしたのである¹²⁰。」ラニツキも、青春時代において、トーニオに自分の姿を投影していたことを述べている。「……トーマスとなると重視にとどまらず、『ブッデンブローク家の人々』を読んで以来、賛嘆・敬愛していたのである。でも若年の私に決定的な作用を及ぼしたのは、もうひとつの本だった。出来としては不完全で、胡散臭いとも見られかねない短編小説『トーニオ・クレীগー』だ。《平凡であることの幸福感》を夢み、《魅力的な陳腐さにこもる生》に自分はあずか

れないだろうと案じ、どこにも帰属していない感じに悩まされ、自家にいながらよそ者のごとく暮らしているトーニオ——何もかも私にそっくりではないかと思つた¹²¹」また、東ドイツに在住していた作家ブルインも、「私はトーニオ・クレীগーの物語を読んだのではない。私の物語を読んだのだ」と簡潔に述べている¹²²。『トーニオ・クレীগー』に自分の青春時代のアイデンティティを見出すこと、自分を再確認すること——それは確かに、時代や場所に関わりなく、文学好きな若者に共通する自然で素直な読み方だったろう。

また、この短編小説に青春の苦しみや痛みを読むことは、とりわけ知的で、将来の道を文学の中に見つけ出したいと願っている若者たちにとって、青春時代の決定的な読書体験でもあつた。ハンス・ヨーゼフ・オルトハイル(Hans-Josef Orthel)は、学校時代に『トーニオ・クレীগー』を、「物書きになるための原小説(Urgeschichte)のように」読み耽り、トーニオに倣つて、イタリアへ旅して芸術家としての示唆を得ようと考えたという¹²³。また、フランスの女流作家サロートも、「私はトーニオ・クレীগーを身内だと感じた。彼は私に似ていると思つた。私は、自分でも執筆することにすでに食指を動かしていた」と回想している¹²⁴。先に紹介した、発表されるとすぐにもこの短編小説に魅了され、再読を試みた若いカフカやシュニッツラー、ヘッセらの作家たちの『トーニオ・クレীগー』体験も、こうした青春の痛みから出発したものであることに間違いない。例えば私たちの国の作家たちを振り返つても、とりわけ北杜夫や辻邦生らのトーマス・マンに魅了された作家たちの『トーニオ・クレীগー』体験も、こうした感覚的な、青春文学としての読みだったと言えよう¹²⁵。この短編小説がそうした青春の方向付けをしたことを、ラニツキはもつと具体的に、かつ明確に公言している。「トーニオにおいて私は、自分を再認識した」と、彼は人生の思い出の中で書いている。「へ人間的なものに関与しないで人間的なものを描くこと」にほととんざりする、というトーニオの嘆きは私の心にぐざりときた。文学の中で生きていくにすぎず、人間的なものから締め出されているのではないか、という危惧——つまり、周りに広がっていなながら手が届かない《美しい緑の牧場》へのあこがれ——はその後も、すっかり念頭から消えはしなかつた。この危惧とあこがれは、わが人生の基調をなしていると言つ

てよい¹²⁰」さらに彼は、人生において自分のアイデンティティをなかなか見つけることのできない人にとって、『トーニオ・クレীগー』は「詩的ハンドブック」(das poetische Kompendium)であると指摘する。「私は一度たりと『トーニオ・クレীগー』を見捨てる気にならなかつた。だから一九八七年にトーマス・マン賞を授与されたとき、お礼のスピーチに何の話をするかは決まりきっていた。自分の非帰属性をうまく解決できない人にとって、詩的ハンドブックの役割を果たしているこの本——について話したわけである¹²⁷。」マン自身も、「いかに多くの世代が生い立ち、青年のタイプがいかに大きく変化しようとも」、「誰しもがこの小説の中に自分自身を再発見し」、若者特有の「ハムレットの憂鬱」によって相変わらず若い人たちの心に『トーニオ・クレীগー』が訴え続けている事実を捉え、この短編小説を青春の典型的な作品とみなして、後には「私の文学的寵児」と表現した。さらに彼は、「私の『ヴェアター』¹²⁸」(Mein > Weather)と呼び、謙虚さも見せずに、「私は、これは不滅だ」という印象をもつた¹²⁹とまで告白した。また、マン自身、晩年、しばしば手紙の中でこの短編小説について語っている。「私の『ヴェアター』であり、ニーチェと『インメンゼー』からなる特有な混合物であるこの典型的な青春の作品が、若い人々に相変わらず、今日もまた好まれてるのは事実です¹³⁰。」「イギリス、アメリカ、フランス、ハンガリーなどの今日の若者たちが、(……)私の苦悩を扱ったこの本の上に顔をかがめているのかと考えると、不思議な気持ちになります¹³¹。」「『トーニオ・クレীগー』は確かに読者に対して全くの満足を与える作品とは言えなかつたが、間違ひなく、若者たちに「青春の痛み」を彷彿とさせる作品だつた。そこにマン自身の、人生への愛の最も根元的な姿として二つの青春時代の友情が描かれていたからである。マンのこの作品で意図した最も根元的なことは、高齢になつても「宝のような、無垢のこの熱情への思い¹³²」を保持していた、少年時代のA・マルテンスへの友情が、そして、この短編小説の成立に大きな影響を与えた同じ青春時代の体験であるP・エーレンベルクとの友情の親密な内的体験がそこに永遠化され、「いつの日か不朽の詩になるはずの感情を呼び起こす¹³³」ことだつたのである。『トーニオ・クレীগー』においては、まさしく、青春時代の体験を創作の中に永遠化するというマンの芸術家としての畏怖に似た感情があり、それゆえに、この短編小説は

若者たちの心に強く訴えかけるができたのだった。

(三) 「文学」のあるべき姿を求めて

『トーニオ・クレীগー』は、その発表十数年後に著されたエッセイ『非政治的人間の考察』において、「散文バラード」と呼ばれ、「あの長大な長編小説という自家製の楽器で演奏されたリートに他ならない」と『ブッデンブローク家の人々』との関連性において捉えられたことはすでに述べたが、そのことに続いてこのエッセイでは、両者の相違点についても触れている。「教養ある中産階級」の心を捉えたのが『ブッデンブローク家の人々』であつたのに対し、『トーニオ・クレীগー』は知的でラディカルな若者たちに、「自分たちにとって相応しいもの」として読まれた、と。そしてその理由として、『ヴェニスに死す』の中の次の文章が引用される。「市井の大衆を喜ばせるのは、澁刺として精神的に拘束されない作品形成の明白さであるが、とどまることを知らぬ情熱をもつた若者たちの心を捉えるのは、ただ問題のものだけである¹³¹。」若者の心を捉えるのは、「問題なものだけ」だというのが、では、『トーニオ・クレীগー』の「問題なもの」とはいったいになのか。マンはそれを、『ブッデンブローク家の人々』において倫理的でペシミスティックなショーペンハウアーと、叙事的で音楽的なヴァーグナーの影響が大であるのに比べ、『トーニオ・クレীগー』ではニーチェの影響が優位なことを挙げて説明する。『トーニオ・クレীগー』では、ショーペンハウアーやヴァーグナーに代わってニーチェが大きく入り込むことによって、道徳的ニヒリズムや文学に比べて生の賛美や擁護が支配的となり、「精神や芸術でないもの、素材で健康で気品があつて問題をはらんでいないもの、精神に毒されていないもの」、そうしたすべての生に対して愛情を寄せて肯定する「エロティック・イロニー」(erotische Ironie)¹³²が顕著である、と。確かに、主人公トーニオが「両側に向けられた」イロニーの中間的存在 (etwas Ironisch-Mittleres) であり、作品全体も「一見異質な要素、つまり、憂愁と批判、誠実と懷疑、シチュラムとニーチェ、情緒と主知主義からなる混合物」であるのも、デカダンスと健康の二つの世界に身を置いて中間的狀況の

パトスに住んだニーチェの影響によるものであろう。すなわち、『非政治的人間の考察』でマンの説明する、若者たちの心を捉えた『トーニオ・クレীগー』の「問題的なもの」とは、生を賛美し擁護しつつ、その生をイロニーの視点で見据える精神のことであつた。そしてそれはまさしく、マンがニーチェから学んだものだったが、それをさらにマンは具体的に次のように説明する。「若者たちの心をかき立てたのは、疑いなく、この小さな物語の中で〈精神〉という概念がどのように扱われ、さらにその精神という概念が、〈芸術〉という概念と一緒になつて、〈文学〉という名のもとに、どのように無意識で物言わぬ生に對置されているか、そうした扱われ方、對置のされ方であつた。……若者たちの心を捉えたものは、疑いなく、この小さな作品のラディカルで文学的な要素であり、主知主義的で解体的な要素であつた。——そしてこの作品のもうひとつの要素であるドイツ的で、情緒的保守的な要素も、この作品に對する彼らの好意をないがしろにすることはなく、それどころか、それを強化しさえした。それはこの要素がイロニーとして現れていて、そのイロニーそのものが最高に主知主義からである¹³⁶。」つまり、『トーニオ・クレীগー』が若者たちに高い人気と肯定的評価を受けた理由とは、精神や芸術を含めた概念としての文学が、生を己に對置し得るものとして捉えながらも、そこにイロニーを持ち込み、当時の文学概念を理性的に解体するような急進性を有していることであつた。作品に對して「若者たちは、造型的なものより精神的なものをはるかに求めた」のだった。知的な若者たちは、生に對して文学の取るべき姿勢を模索していたのである。一九〇二年にマンが、当時の退廢的でデカダンスな文学を見据えて語つた「呪うべき文学」「文学は死です」という文学觀に對して、「私はもつとより良いことをするでしょう」と最後に約束するトーニオの生に對するイロニー的態度——そこに精神の、芸術の、文学の進むべき道があると知的な若者たちは考え、『トーニオ・クレীগー』を好んで讀んだのだつた。

確かに、十九世紀末のドイツ文学の潮流は、生に對する意識に欠けていた。生に對して文学は孤立した状況にあつた。世紀末において、人間が外的世界の肥大化を前に萎縮し、機械化され物質化されて、物たちに不気味に襲いかかられる、そうした物たちの反乱を「物の自立化」(dingliche Verselbständigung) と名付けたのはヴァルター・イェンス (Walter Jens)¹³⁷だつ

た。また、ホーフマンスタールが『チャンドス卿の手紙』¹³⁸で、人間の自我が日常的現実から全く孤立し、現実のすべての事物を今までの習慣的な言葉では表現できなくなった苦悩を描いたのも、世紀末の現実世界からの文学の孤立を示すものに他ならなかった。その当時の文学の危機的状况を、イェンスは次のように指摘する。「十九世紀の伝統が断ち切られた」今、〈自我〉は〈現にあるもの〉の猛攻を受けてその力を失い、客体は主体から遊離し、対象が個人を規定して、作家からその〈創造者〉としての機能を奪い、現実にはもはや日常の言語をもつては捕捉しがたいものと思われ、存在の統一は瓦解する。¹³⁹ こうした文学と社会の断絶という時代状況の中では、当然のように、文学は自我の内面に沈替し、現実を無視して、現実の届かぬところで行われるようになり、その非日常的な形而上学的営為は大衆の理解できないものとなっていく。そして、それによつてますます社会における文学の孤立は大きくなる。その最も端的な例が、現実を価値のないものとして絶縁して、「芸術のための芸術」(Kunst für Kunst)を打ち立てたシュテファン・ゲオルゲであった。¹⁴⁰ 二十世紀の文学がその始まりにおいて自ら好んで引き受けたこの文学の孤立という問題に対して、当然のように、社会の側から、文学は何の役に立つのかという疑問が提出された。この世紀末の顕著な現象をマンは次のように説明する。「今日では(……)天才や自我、精神、孤独が芸術の出発点になっている。(……)芸術家はこれまで芸術が歩んできたその嚴肅化の過程によつて、病める鷹になつてしまった。この過程は、——一般的にみて——芸術家精神を一種不幸なふうの高揚させ、憂鬱にし、そればかりか、芸術そのものもまた、孤独で憂鬱で孤立した理解し難いものにし、一種の〈病める鷹〉にしてしまった。¹⁴¹」マンは、作家としてこの「病める鷹」(Kranker Adler)であることからの回復を目指した。初期の短編小説においてマンは、社会から孤立している文学および芸術家を描きながら、それらをいかに社会の存在とするかを問題としたのだった。後の作品で彼は、その打開策を次のように提示している。「選ばれた教養階級はまもなく存在しなくなるだろう。いや、もはや存在してはいないのだ。だから芸術もやがては完全に孤独に、しかも死滅するほどに孤独になるだろう。もし芸術が〈大衆〉(Volk)への道を、(……)つまり人間への道を見いださなければ¹⁴²」社会から孤立した文学の打開策として、大衆への、人間への道を

提言するマンのこの言葉は、自我の内面に下降し、非現実な世界で自我の意識を見つめ、現代人のもつ不安を告白し続けた
 ホーフマンスタールやリルケ、カフカとは違った。しかし若い読者たちは、極端な嚴肅性や高踏さを嫌って、非日常の世界
 に沈潜することなく時代の病気をしっかりと見詰めて、あるべき作家としての道を探そうとして、「私はもっとより良いこ
 とをするでしょう」と約束するトーニオに、自分たち知的な人間の進むべき道を託したのであった。

要するに、『トーニオ・クレীগー』が、「呪うべき文学」「文学は死です」といった、文学が社会から孤立し、それにと
 もなつて芸術家も孤立していた世紀末の病氣の中で創作されたことを忘れてはならない。マンは、若い作家として生きるに
 当たって、当時の文学の置かれている状況の中で敏感に感じ取ったことを、その矛盾の中での決意を『トーニオ・クレীগー』
 において描いたのであった。その意味で、『トーニオ・クレীগー』を一九〇〇年初頭の現実と精神風土と切り離して解釈す
 ることはできない。『トーニオ・クレীগー』においては、私たちは、文学の社会との繋がりの喪失や、芸術家の大衆から
 の逸脱における苦悩の描写を読み取らなければならない。『トーニオ・クレীগー』に心を捉えられ魅了された若者たちは、
 文学のあるべき姿がこの短編小説の中にラディカルに主知主義的に描かれているゆえに、この本をなんども読み、高い評価
 を与えたのであった。

108 XI. S.115f. (Lebensabriß)

109 VIII. S.271. (Tonio Kröger)

110 XI. S.116. (Lebensabriß)

111 Hermann Stresau: Thomas Mann und sein Werk, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1963, S.255.

112 Kurt Bräutigam: Thomas Mann Tonio Kröger, R.Oldenbourg Verlag, München, 1969, S.12. Hermann Wiegmann:
 Erzählungen Thomas Manns, S.106.

- 113 XII. S.90. (Betrachtungen eines Unpolitischen)
- 114 XI. S.112. (Lebensabriß)
- 115 Ulrich Karthaus: Thomas Mann, Philipp Reclam, Stuttgart, 1994, S.18.
- 116 VIII. S.336. (Tonio Kröger)
- 117 Erich Heller: Thomas Mann Der ironische Deutsche, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1970, S.65.
- 118 XIII. S.144. (On Myself)
- 119 XI.S.708. (Vorwort zur ungarischen Ausgabe der Novellen)
- 120 Klaus Harpprecht: Thomas Mann Eine Biographie, Rowohlt Verlag, 1995, S.170.
- 121 M・ライヒヒラニツキ『わがユダヤ・ドイツ・ポーランド。マルセル・ライヒヒラニツキ自伝』(西川賢一訳)、柏書房、二〇〇二年、八十八頁。
- 122 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.107f.
- 123 Hans-Josef Ortheil: Das Element des Elephanten Wie mein Schreiben begann, 1994. (Martin Neubauer: Thomas Mann Tonio Kröger, S.56.)
- 124 Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Eine Jahrhundertzählung >Tonio Kröger<, S.102.
- 125 トーニオの青春の痛みが作家としての生と深く結びついたわが国の作家としては、まず、北杜夫と辻邦生が挙ろう(北杜夫・辻邦生対談集『若き日と文学』、中央公論社、一九七〇年。辻邦生『トーマス・マン』、岩波書店、一九八三年)。とりわけ、北のどくとるマンボウ・シリーズや『幽霊』『木精』などにはトーニオとの渾然とした一体感さえ感じられる。他に、その二元論を学んだ三島由起夫、作家としての対象との距離を学んだ吉行淳之介らがいる。
- 126 M・ライヒヒラニツキ『わがユダヤ・ドイツ・ポーランド。マルセル・ライヒヒラニツキ自伝』、八十八頁。

- 127 同上。また、ラニツキは別の論文で、『トニーオ・クレীগー』を「二つの世界で、どちらの世界も我が家とすることができずに、自分の非帰属性をうまく解決できないあらゆる人の詩的ハンドブックである」と述べている。(Marcel Reich-Ranicki: Thomas Mann Glück und Unglück der Alleinreisenden, in: Sieben Wegbereiter, S.117.)
- 128 Thomas Mann Briefe 1937-1977, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1963, S.202. (1941.7.26.)
- 129 Hans Wysling (Herg.) : Thomas Mann Teil 1:1889-1917, S.169. (1952.5.31)
Ibid., S.168. (1948.6.26)
- 130 Thomas Mann Briefe 1948-1955 und Nachlese, S.387. (1955.3.19)
- 131 Ibid.
- 132 XII. S.90. (Betrachtungen eines Unpolitischen)
- 133 Ibid., S.91.
- 134 Ibid., S.92.
- 135 Walter Jens: Der Mensch und die Dinge, in: Statt einer Literaturgeschichte, G.Neske Verlag, Pfullingen, 1962, S.114.
- 136 Hugo von Hofmannsthal: Ein Brief, in: Gesammelte Werke Prosa II (Herg. Herbert Steiner), S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1951, S.10fff.
- 137 Walter Jens: Der Mensch und die Dinge, S.110.
- 138 ゲオルゲは、主宰する雑誌『芸術草紙』(Blätter für die Kunst)の冒頭で自分の考えを次のように言う。「この草紙は、芸術、とりわけ文学と著作に奉仕するものであり、一切の政治的事柄や社会的事柄とは決別するものである。この草紙は、新しい感覚の手法を基盤とした精神芸術を——つまり、芸術のための芸術を——要求するのであり、従ってまた、誤つ

た現実から生まれた、あの老朽し、価値を失ったすべての詩人党派に対立する。この草紙はまた、現実の人々がすべての新しいものの萌芽と見ている世界改善や万人の幸福を夢想することなどには敢えて関係をもとうとしない。そうしたことは、確かに非常に美しいことには違いないが、しかし、芸術の領域とはまた、別個のところ、に属することなのである。」(Stefan George: Blätter für die Kunst (Hrsg. Carl August Klein), Verlag Helmut Kupper, Düsseldorf-München, 1968, S.1)

141 IX. S.469f. (Meerfahrt mit >Don Quijote<)

142 VI. S.428f. (Doktor Faustus)